人文科学論集
2017, No. 96, 29−43

マテリアル・フェミニズムから マテリアル・エコクリティシズムへ

川　津　雅　江

1. エコクリティシズムの現在

エコクリティシズムの第一人者スコット・スロヴィックは，2010 年に創刊された『エコゾン@』（*Ecozon@*）の巻頭を飾る論文「第三波エコクリティシズム―現段階のエコクリティシズム研究についての北米の考え」において，1980 年頃からはじまった「ノンフィクションの『ネイチャー・ライティング』，非-人間（non-human）的性質のウィルダネス経験，英米文学，そして『言説的』エコフェミニズム（すなわち，女性とその他の自然は特別なつながりをもつとする思想）」（Slovic, "Third Wave" 4 -5）に注目したエコクリティシズムを「第一波」，1995 年頃からはじまったノンフィクションに限定しない多様な文学ジャンルの研究，文学の境界を超えた「グリーン・カルチュラル・スタディーズ」，世界中の様々な環境芸術・文学，環境正義エコクリティシズム，都会や郊外への興味，ウィルダネスの価値の維持などの研究を「第二波」として分類した。21 世紀に入ると，比較文化横断的アプローチもなされるようになったが，これが「第三波」エコクリティシズムである[1]。スロヴィックによれば，それは，（1）「場所のグローバルな概念」と「特定なローカルに傾倒するネオ・バイオリージョナリズム」研究，（2）環境経験のポストナショナル，ポストエスニック的展望，（3）新しいジェンダー・アプローチの「『マテリアル』・エコフェミニズム」，「エコ・マスキュラニズム」，「グリーン・クイア理論」，（4）「アニマリティ」研究，（5）批評理論なしで活動する「内からの批判」，（6）文学を持続可能なライフスタイルを描く手段とするような「種々の形態の活動家」を指す（Slovic, "Third Wave" 7）。

そして，2012 年秋に発行された『文学・環境学際的研究』（*ISLE*）の「編集記」では，スロヴィックは早くも「第四波エコクリティシズム」の到来を告げた。それは「第三波」中の一つ「マテリアルの傾向」に端を発し，「環境保護的なモノ，場所，過程，力，そして経験の基礎をなすマテリアリティ（身体性，結果性）」，「食や移動様式や衣服や住まい

のような基本的な人間の行動やライフスタイルの選択」にも目を向けた「マテリアル・エコクリティシズム」である（Slovic, "Editor's Note" 620）。その一部はすでに2012年夏の『文学・環境学際的研究』特集号「マテリアル・エコクリティシズム―汚物，廃棄物，身体，食物，そしてその他の物質」で示されていた（Phillips and Sullivan）。

2016年8月5日の東京・専修大学での講演では，スロヴィックはさらに具体的に，エコクリティシズムの「マテリアルの傾向」は，2008年にステイシー・アライモとスーザン・ヘックマン編集の『マテリアル・フェミニズムズ』が出版されたことをきっかけに「新マテリアニズム」哲学が流行したことと期を一にするとした。そして，第四波エコクリティシズムの流れは，セラネラ・イオヴィーノとセルピル・オッパーマン編『マテリアル・エコクリティシズム』（2014）の出版を経て，まだ進行中であると述べた。

本論は，こうしたエコクリティシズムの目覚ましい発展のうち，エコフェミニズムに注目する。スロヴィックは第三波の中に「『マテリアル』・エコフェミニズム」を入れ，第四波の「マテリアル・エコクリティシズム」と分けているが，そこに違いがあるのだろうか。またスロヴィックは第一波の中に「『言説的』エコフェミニズム」を入れているが，それはどういうものであろうか。本論では，まずタームの再確認をするために，フェミニズム史におけるエコフェミニズムの流れを簡単に整理する。そのあとで，マテリアル・フェミニズムの定義を明らかにするとともに，マテリアル・フェミニズムからマテリアル・エコクリティシズムへの流れを辿ってみたい。

2. 女性と自然（動物）

西洋では，18世紀啓蒙時代の人道主義・合理主義の伝統を経て現代まで長い間，男性（＝人間）が文化，精神，理性などと結びつけられたのに対し，女性は自然（動物），物質や身体，感情などと関連づけられ，男性や男性的なものより劣っていると見なされてきた。そのため，フェミニストにとって，自然（動物）をどう扱うかは常に問題になってきた。もし，女性が自然（動物）問題に関心を示せば，女性は自然（動物）に近いと見なされ，不当に軽視される恐れがある。そこで，メアリ・ウルストンクラフトに始まるリベラル・フェミニズムは，女性が男性と同じ社会的・経済的・政治的平等を勝ち取るために，女性は動物とは違って，男性のように理性的精神を持つことを強調した。つまり，女性は男性と同じく人間であるから，動物より上であると主張した。また，ボーヴォワールの後継者モニック・ウィティッグのような「フェミニスト革命派」は性差を社会的構築物と見なすことによって，女性を自然（動物）から引き離した。

一方，1960年代に登場したラディカル・フェミニズムは，家父長制制度こそ女性のあらゆる抑圧の根源（ラディカル）であるとして批判し，伝統的なジェンダー・ロールに反対するとともに，女性に対するレイプなどの性的暴力も糾弾した。1970年代末期に出現

したエコフェミニズムはこのラディカル・フェミニズムから派生したものである。エコフェミニズムは，女性と自然（動物）の分離を問題視し，男性は女性と自然（動物）を同じように支配し，搾取していると考えた。この立場のエコフェミニストの代表は，『女性と自然』（1978）のスーザン・グリフィン，『女性／エコロジー』（1978）のメアリ・デイリ，『自然の死』（1980）のキャロリン・マーチャントである。そして1983年には最初のエコフェミニズム論集，レオニー・カルデコットとステファニ・リーランド編『地球を取り戻せ―女性たちは地球上の生命のために声を上げる』が出版された。

しかしながら，ラディカル・フェミニズムや初期のエコフェミニズムの主張は結局のところ西洋思想の二元論（男性／女性，文化／自然，精神／身体，理性／感情など）を前提としていたため，1990年頃に出現したポストモダニズムやポスト構造主義のフェミニズムによって，「本質主義者」（女性は生来的に自然に近接していると考え，ジェンダー差を普遍的な本質と見なす立場）として批判された。ポストモダニズムやポスト構造主義のフェミニズムはいかにジェンダーが差異の文化システム内で，階級，人種，セクシュアリティのような流動的な標識で表現されてきたかを探るとともに，女性を抑圧する西洋思想の二元論そのものの脱構築を目論んだ。

3. エコフェミニズム（1990年代）

こうしたポストモダニズムやポスト構造主義は20世紀末期以降時代を席巻し，フェミニズム思想に莫大な成果をもたらした。一方，フェミニズム思想の中でマイナーな存在になったエコフェミニズムはポストモダニズムに影響を受けつつ，それとの差別化を図ろうとした。たとえば，ポストモダン・フェミニズムは言説だけを重視して現実の人々の経験の多様性を無視する傾向があり，政治活動へと動かす力はなかったが，エコフェミニズムは西洋だけではなく世界中の人々の多様な経験を考慮し，生物学的多様性の一部として文化的多様性を持続することを主張して，社会変革を求めた。

イネストラ・キングは，『傷を癒す―エコフェミニズムの約束』（1989）中に所収した論文「フェミニズムのエコロジーとエコロジーのフェミニズム」において，エコフェミニズムの基本原理として以下の四つを掲げている（King, "Ecology" 19-20）。

（1）すべての自然の生命闘争を女性自身のものと見なす。
（2）地球上の生命はヒエラルキーではなく，交互に結合した網（ウェブ）なので，非-人間を含むあらゆる形態の支配間の結びつきを示す。
（3）人間と非-人間を含む健康なエコシステムは多様性を維持しなければならないので，多様性を尊重した分散化したグローバルな運動を目指す。
（4）種の存続のために，われわれと自然との関係について再考し，そして自然と文

化の二元論に異議申し立てをする。

アイリーン・ダイアモンドとグロリア・オレンスタインは，『世界を織りなおす—エコフェミニズムの開花』（1990）の序の中で，エコフェミニズムの目的は女性解放だけではないことを次のように述べている。

> エコフェミニストの政治学は西洋文明の男性中心的，人間中心的偏重をはぎ取る段階で終わらない。……エコフェミニズムはあらゆる生命を持続する生物学的・文化的多様性を認め，尊重する新しい物語を編むことを求める。これらの新しい物語は女性の生物学的特性を怖れるよりもむしろ敬い，その一方で，同時に女性を主体として，そして歴史の作り手として擁護する。生物学的特性が歴史的働きと相反する必要はないというこの理解はフェミニズムの変容にとってきわめて重要である。（Diamond and Orestein xi）

同様に，『エコフェミニズム—女性，動物，自然』（1993）の中で，編者のグレタ・ガードは，「人種，階級，ジェンダー，セクシュアリティ，身体能力，そして種に基づくような抑圧を公認するイデオロギーは自然の抑圧を認可しているイデオロギーと同じである」と主張し，「エコフェミニズムはすべての抑圧の撤廃を求める。そして女性（もしくはその他の被抑圧グループ）の解放の企ては，自然の解放の同様の企てなくしては成功しないだろうと主張する」（Gaard, "Living Interconnections" 1）と宣言した。そして，『エコフェミニズム』所収の論文は「家父長制的思想の自然／文化の二元論を拒絶し，自然の中に動物と人間を置く」（6）と指摘し，これはエコフェミニズムの枠組みの再概念化の試みであると述べている。

フェミニスト科学研究家・サイボーグ理論家のダナ・ハラウェイも，「エコフェミニストは，ブルジョワジー，マルキスト，あるいは男性中心的プロジェクトの中に位置づけられ，割り当てられるための源泉としてではなく，活動的な主体としての世界像をおそらく最も主張してきた」（Harraway, *Simians* 199）と力説する。つまり，エコフェミニズムは，社会を変えることができるエージェンシー（agency）を人間だけではなく，人間と世界を共有している様々な非-人間も有していると考えた。ハラウェイによれば，「あらゆる種類のモノ（things）が行為者（actors）である。そのうちのいくらかだけが人間の言葉を持つ行為者である。……あなたはあらゆる種類の雑多な存在を社会的行為者として含めなければならない。……この義務は言語を持つ行為者だけが一種のエージェンシーを持つという概念を解体する手助けになる」（Penley, Ross, and Haraway 9）のである。

パトリック・D・マーフィによれば，こうしたエージェンシーの拡大は，絶対的な二項対立の「自己と他者」（self and other）ではなく，「われわれと別の人/もの」」（we and

another）と捉える見方を生み出す（Murphy, *Literature* 152-53）。「別の人/もの」であることは，ヒエラルキーではなく，差異のヘテラーキー（異階層）観から生じる。そして，われわれはずっと自分にとって自分であるだけではなく，いつも同時に他のものたちにとって別の存在であるということを認めることである（Murphy, *Literature* 152）。マーフィは，1997 年に発表した論文「エコフェミニズムとポストモダニズム—エージェンシー，変容，そして未来の可能性」において，こうした「別の人/もの」の考えは「健康な生態系の多様性を相互に連結した網」として見なすエコフェミニズムの考えに相応すると述べている（Murphy, "Ecofeminism" 51）。そしてポストモダニズムが現在の状況を分析し，それに対し「否定的な批判」をするだけにとどまるに対し，エコフェミニズムはもっと良い「未来に焦点をおいている」と，両者の違いを明記した（Murphy, "Ecofeminism" 42）。

4.「言説の傾向」から「マテリアルの傾向」へ

21 世紀に入って登場したマテリアル・フェミニズムは，まさに 1997 年にマーフィが示唆したエコフェミニズムの取るべき未来像の実現であったと言ってよい。『マテリアル・フェミニズムズ』（2008）のアライモとヘックマンは次のようにポストモダン・フェミニズムの言説偏重に異議を申し立てる。ポストモダニズムにとって，「リアルなもの／マテリアルなものはただ単に言語によって構築される。われわれがリアルなものと呼ぶものは言語の産物であり，言語にだけリアリティがあるのである」（Alaimo and Hekman, "Introduction" 2）。そのため，たとえば，身体研究は現実の痛みや喜びを持つ「身体」ではなく，「身体について言説」（3）の分析だった。マテリアル・フェミニズムはこうしたポストモダン・フェミニズムにおける「リアリティ」や「マテリアリティからの退却」（3）の傾向に反対し，フェミニズムにおける「マテリアルの傾向」を宣言するのである。

「マテリアルの傾向」は世紀の変わり目頃から，フェミニズムだけではなく他の分野でも顕著になっている。文学研究では，18 世紀のイギリスで流行ったイット・ナラティヴ小説への関心が高まり，マーク・ブラックウェル編集『モノの秘密の生活—動物，事物，そして 18 世紀イングランドのイット・ナラティヴ小説』（2007）やブラックウェル編集主幹の 4 巻本の全集『英国イット・ナラティヴ小説，1750 年—1830 年』（2012）などが出版された。メアリ・メラーが指摘するようにエコフェミニズムはもともとマテリアルとの結びつきが強かったが（Mellor 178-96），イギリスの環境主義批評では，オンノ・オールマンズの『ロマン主義と自然のマテリアリティ』（2002）も，イギリス・ロマン主義時代の男性作家の自然観のマテリアリティについて考察している。オールマンズの本はスロヴィックをはじめとするアメリカの環境主義批評家たちによって看過されているけれども，エコクリティシズムにおけるマテリアルの傾向を一番早期に示していると言ってよい。

ところで，マテリアル・フェミニズムに似た用語で，マテリアリスト・フェミニズムがあるが，ここで両者の違いを確認しておかねばならない。『マテリアリスト・フェミニズム―階級，差異，女性の生活読本』（1999）を書評したレベッカ・サリヴァンによると，マテリアリスト・フェミニズムは1960年代後期から1970年代初期に，女性の公的私的生活に目を向けた「社会主義フェミニズム」から派生した。マルキスト理論と強い結びつきがあるが，ある特定の社会の物質的条件に基づく社会的分析や社会的関係の問題としての言説にアプローチする。これらの物質的条件はジェンダーだけではなく，女性の実際の生活との関係によって考察される。これに対して，後述するように，マテリアル・フェミニズムにおけるマテリアリティの定義はマルクス主義的ではない。

5. マテリアル・フェミニズム

では，マテリアル・フェミニズムとは何か。『マテリアル・フェミニズムズ』の編者アライモとヘックマンの序文を解説しつつ，その特徴をまとめてみたい。

二人の序によれば，マテリアル・フェミニズムはエコフェミニズム（もしくは環境主義的フェミニズム）とフェミニスト科学研究から派生した。ここで二人が言及するエコフェミニズムとは，ポストモダン・フェミニズムが批判の対象にした1980年代のエコフェミニズムではなく，1990年代以降のポストモダニズム時代に細々と生き残っていた一派のことであろう。このいわば新しいエコフェミニズムは，「非-人間の自然だけではなく，さまざまな女性たち，第三世界の人々，土着民，有色人，その他の目立ったグループ」（Alaimo and Hekman, "Introduction" 4）にも害を与える自然／文化の二元論を複製する理論に満足できない。そこで，自然を男性／人間の搾取の場とする自然／文化の二元論を続けるよりもむしろ，「自然そのものの再概念化」を目指したのである（4）。

マテリアル・フェミニズムに影響を与えたもう一つの思想であるフェミニスト科学研究についても同様の思想の発展があった。初期のフェミニストは，科学の男性中心主義（科学は男性の構築物，男性の視点，男性の認識論であるとする考え）に焦点をあてて科学を批判し，科学も人間の他の活動と同様社会的構築物であると論じた。これに対し，社会的構築主義の見方を維持したまま，マテリアリティを科学の中にもたらすアプローチを探す動きが現れた。サンドラ・ハーディング，ヘレン・ロンギーノ，ロレイン・コード，リン・ハンキンソン・ネルソンのような「新経験論」者らは，社会的構築論を捨てることなく，経験論的，マテリアルな要素を保持しようとした。さらに近年では，ブルーノ・ラトゥールやアンドリュー・ピッカリングが科学的概念の認識論から存在論やマテリアリティへと視点を移している。ダナ・ハラウェイやカレン・バラッドのようなフェミニスト科学批評家は，「人間，非-人間，テクノロジー，自然をすべてわれわれの日常世界の要素を構成するエージェントとして定義する理論」を展開し，また，エリザベス・A・ウィルソンも

「精神と物質の存在論的，相互，共構成」を主張している（Alamo and Hekman, "Introduction" 5）。

こうした新しいエコクリティシズムと新しいフェミニスト科学研究の成果を基盤にしたマテリアル・フェミニズムの特徴は以下のようにまとめることができる。

（1）受動的な沈黙の自然からエージェントとしての自然へ

ポストモダンやポスト構造主義のフェミニズムが女性を自然から引き離すに対し，マテリアル・フェミニズムは自然の再定義，再評価を求める。マテリアル・フェミニズムでは，自然は「受動的な社会的構築物」ではなく，むしろ，「混合物の中の（人間を含む）他の諸要素と相互に作用し，それらを変えるエージェント的力」（Alaimo and Hekman, "Introduction" 7）である。つまり，自然は，「文化の偉業のための空白で沈黙の資源ではない。性差別，人種差別，同性愛嫌悪の容器でもない。むしろ自然は能動的で意義深い力である。すなわち，それ自身に関してエージェントであり，多様な相互作用と内的-活動（intra-active）の諸文化の領域である」（12）。

アライモとヘックマンからの上記引用中の「内的-活動」という語が示すように，マテリアル・フェミニズムのキータームの多くはバラッドの概念に負っている。バラッドは「内的-活動」を次のように定義する。

> 内的-活動とは，もつれ合ったエージェンシーの相互の構成を意味する。すなわち，通常の「相互作用」（それはその相互作用に先行して分離した個々のエージェンシーがあることを前提とする）と対照的に，内的-活動の概念は，明瞭なエージェンシーが先行してあるのではなく，内的-活動を通して出現するということを認めるのである。（Barad, *Meeting* 33）

そして，エージェンシーとは，「誰か，もしくは何かが持っているものではなく，演技である」（Barad, *Meeting* 178）。それは「属性」ではなく，「その内的-活動における『行動』もしくは『存在』」（Barad, *Meeting* 178）である。『マテリアル・フェミニズムズ』に所収した論文では，バラッドは次のように言い換えている。

> 要するに，宇宙はその生成において，エージェントの内的-活動である。主たる存在論的単位は「モノ」ではなく現象―すなわち，ダイナミックな位相的再構成／絡み合い／関係性／（再）結合―である。そして主たる意味論的単位は「言葉」ではなく，それを通して様々な境界が構成されるマテリアル的-言説的実践（material-discursive practices）である。このダイナミズムがエージェンシーである。エージェンシーは世界の属性ではなく，世界を継続的に再構成する。（Barad, "Posthumanist

Performativity" 135-36）

エージェント的リアリズムの説明では，物質（matter）は固定した物体（substance）を指さない。むしろ物質はその内的-活動の生成における物である—モノ（a thing）ではなく行為（a doing），エージェンシーの凝固である。物質は反復する内的-活動の安定化と不安定化の過程である。（Barad, "Posthumanist Performativity" 139）

のちに詳述するマテリアル・エコクリティシズムの論者は，バラッドの内的-活動の概念は，われわれの焦点を人間と非-人間との相互作用から，マテリアルな世界と人間の言説との間の内的-活動へと変えさせ，このアプローチは人間中心主義，ロゴス中心主義，男性中心主義的秩序の変容を求めると説明している（Iovino and Opperman, "Theorizing Material Ecociriticism" 467）。

(2) 認識論から存在論へ＝表象主義からパフォーマティヴィティへ

スーザン・ヘックマンは『マテリアル・フェミニズムズ』所収の論文「バラストを組み立てる—フェミニズムにとっての存在論」において，マテリアル・フェミニズムは「認識論」から「存在論」への動きを示すと指摘した（Hekman, "Constructing the Ballast" 109）。バラッドはそれを言い換えて，「表象主義」から「パフォーマティヴィティ」への動きであるとする（Barad, "Posthumanist Performativity" 122）。パフォーマティヴィティの用語はジュディス・バトラーのフェミニズムやクイア理論，ハラウェイ，ブルーノ・ラトール，ジョゼフ・ラウスらの科学研究でも使われたが，バラッドは「ポストヒューマニスト・パフォーマティヴィティ」を提案する。それは「マテリアル的なものと言説的なもの，社会的なものと科学的なもの，人間と非-人間，そして自然的要素と文化的要素」（Barad, "Posthumanist Performativity" 126）を混合するものである。ちなみにバラッドのいう「ポストヒュ—マニスト」とは「非-人間が自然文化実践において重要な役割を果たすことを認識すること」であり，「ポストヒューマニズム」とは，「リアリティの一つの捉え方で，その中では人間と非-人間が合流し，共に出現し，相互関係において互いを定義する。その特徴は『人間』と『非-人間』の区別を当然視しようとしないこと，このおそらく固定的・内在的な一対のカテゴリーに基づいて分析しようとしないこと」（Barad, *Meeting* 32）である。すなわち，ポストヒューマニズムは人間と非-人間の融合，内的-活動を強調する。

(3) 物語られる物質

マテリアル・フェミニズムでは，物質と言説は密接な関係にある。バラッドは以下のよ

うに説明している。

> 換言すれば，ちょうど言説的実践が常にすでにマテリアルであるように（すなわち，言説的実践とはたゆまなく世界を物質的に（再）構成することである），マテリアリティとは言説的である（すなわち，マテリアルな現象は身体的生産とは不可分である。物質は，さまざまな境界のたゆまない再構成から現れ，そしてそれをその存在の一部として包含する）。言説的実践とマテリアルな現象は互いに外部的な関係にあるのではない。むしろマテリアルなものと言説的なものは内的-活動のダイナミックスの中で相互に絡み合っているのである。（Barad, "Posthuman Performativity" 140）

従って，いわゆる「物語られる物質」（a 'storied matter'）に焦点が当てられる[2]。たとえば，『マテリアル・フェミニズムズ』に収められたハラウェイの論文「別世界の会話，地域の話題，地元の言葉遣い」では，人間と非-人間の出会いの「物語」が分析されている。

（4）環境政治・環境保護思想への影響力

最後にマテリアル・フェミニズムは，エコロジー思想や実践を変容させる力を持つ。すなわち自然を政治や科学の領域の「顕著なアクター」と見なすことで，環境政治や環境科学を変えることができるのである。また，「人間の肉体と非-人間の性質の共構成的マテリアリティ」（Alaimo and Hekman, "Introduction" 9）の考えは環境保護そのものを変える可能性も提供する。つまり，人間と自然を分かつウィルダネス的モデルに環境政治の焦点をあてるのではなく，人間と非-人間が共に包括的にマテリアリティであるということから始める考えは，多様な可能性を秘めた新しい環境の道を作るのである。たとえば，環境政治的正義はどこか遠い場所ではなく，家庭や学校や近隣の問題になる。また水銀やダイオキシンのような「毒素の流れを辿ることは科学的／経済的／政治的／倫理的分析だけではなく」，これまで切り離して考えていたこと，すなわち，「毒素をもたらした労働者自身」の健康や「近隣の状況」，「毒素を食べる家畜や野生動物」，「毒素を食べた動物を食べる人間」への影響なども視野に入れることになるのである。

6. マテリアル・エコクリティシズム

『マテリアル・フェミニズムズ』の序でマテリアル・フェミニズムが環境保護思想を変える可能性が示唆されていたが，それが顕在化したのは 2012 年になってからだった。2012 年の『エコゾン@』で，イオヴィーノとオッパーマンはそれを「マテリアル・エコクリティシズム」と命名した。

二人は共著論文「マテリアル・エコクリティシズム—マテリアリティ，エージェンシー，そしてナラティヴィティのモデル」において，2008年の『マテリアル・フェミニズムズ』に続いて起こった出版界の「マテリアルの傾向」の流行を指摘し，マテリアル・エコクリティシズムへの影響を詳しく論じた。また同誌所収のイオヴィーノの「マテリアル・エコクリティシズムへの道のり—『新マテリアリズム』に関する最近の文献，およびエコクリティカル理論への影響」は，『マテリアル・フェミニズムズ』とそれに続く新マテリアリズム関連の書物—ステイシー・アライモ『身体的自然—科学，環境，そして物質的自己』(2010)，ジェーン・ベネット『振動する物質—モノの政治的エコロジー』(2010)，デイヴィッド・エイブラム『動物になる』(2010) の書評である。

マテリアル・フェミニズムや新マテリアリズムからの第一の影響は「物質はエージェンシーを有する」という考えである。

> 物質がエージェント的で，それ自身の意味を生じることができるのならば，あらゆるマテリアルの配置は，身体からその生のコンテクストまで，「語り」であり，それ故に批評分析の対象になりうる。その批評分析はその物語，そのマテリアルと言説の相互作用，「生成の振付」(Coole and Frost 10) におけるその場所を発見することを目論むものである。(Iovino and Oppermann, "Material Ecocriticism" 79)

マテリアル・エコクリティシズムにおける「物質のエージェンシー」を解釈する方法は二つある。

> 一つの方法は，物質（あるいは自然の非-人間）のエージェント的能力が（文学，文化，映像の）ナラティヴのテクストの中でどのように述べられ，表されているかに焦点をおくことである。二つ目の方法は，意味と物体 (substance) の相対的配置を創り出す物質の「ナラティヴな」力に焦点をおくことである。……後者の場合，物質そのものがテクストになり，その中で「散漫な」エージェンシーと非直線的な因果関係の力学が記述され，生み出される。(Iovino and Oppermann, "Material Ecocriticism" 79-80)

物質のエージェント力の表現はほとんどすべての文学伝統に見つけることができる。18世紀に流行したイット・ナラティヴ小説は物質がエージェント力を持つ最適の例である。「モノは自分たちの物語を語る」が，「人間の読者に対してではなく仲間の『モノ』に対して」語る。これは「いかに物質と意味が人間と非-人間，主体と客体の間の内的-活動関係を生み出す意味作用に入るかを示す明白なナラティヴの例である」(Iovino and Oppermann, "Material Ecocriticism" 82)。

マテリアル・エコクリティシズムにおいては，モノの擬人化は，モノのエージェント力を強調する語りの方策である。

> マテリアル・エコクリティシズムのコンテクストにおいては，モノ，場所，自然の要素，非-人間の動物の人間化は必ずしも人間中心的・ヒエラルキー的ヴィジョンのしるしではなく，物質のエージェント力とその諸要素の水平性を強調するための語りの方策でありうる。もしこの批評の視点で捉えれば，擬人化された表象は人間と非-人間の間の類似性と対称性を示すことができる。こうして，分類別な分割を強調する代わりに，擬人化は潜在的に「人間中心主義に反対するように働くのである」（Bennett, *Vibrant* 120）。（Iovino and Oppermann, "Material Ecocriticism" 82）

マテリアル・エコクリティシズムは批評方法としてポストヒューマニズムでもある。2012年夏の『文学・環境学際的研究』特集号中の論文「マテリアル・エコクリティシズムを理論化する―ディプティック」で，イオヴィーノとオッパーマンはマテリアル・エコクリティシズムについて次のように説明している。すなわち，それは，「具象化と物質性の問題」，「非-人間（動物，機械，環境）のエージェンシー」，「ウィルスやバクテリアのように，人間の支配や言語の外のモノに対するポストヒューマニスト的関心」にわれわれの興味を引かせ，文化的文学的テクストの中で，いかにわれわれが世界と，そして言説の世界と，内的-活動しているかを分析するものである（Iovino and Opperman, "Theorizing Material Ecociriticism" 469）。

イオヴィーノとオッパーマンは，2014年に出版された『マテリアル・エコクリティシズム』の編集にも携わった。彼女たちはその序で，改めてマテリアル・エコクリティシズムの基本的前提の考えとして，「エージェンシーの周延的な捉え方，世界の現象の発現的性質，われわれは人間的物質と非-人間的物質を交配する活力によって交差する次元に住んでいるという意識，そして最後に，物質と意味がわれわれの語られた世界の織物を構成しているという確信」（Iovino and Oppermann, "Introduction" 5）を記している。これらはマテリアル・エコフェミニズムと共通する考えである。

しかし，『マテリアル・エコクリティシズム』にはこれまで言及されていない概念が提出された。それは，バラッドのいう「回折」（diffraction）である。バラッドによれば，人間は「世界の外にいる観察者」ではなく，非-人間と同様に「世界の一部」であり，内的-活動をし続ける存在なので，「理解できること［解釈］は，明瞭な表現における世界の存在論的なパフォーマンスである。それは人間に左右される特徴ではなく，特異に生成する世界の特質である。……知ることは内的-活動の物質である」（Barad, *Meeting* 149）。しかし，語られる世界の中では，あらゆる認識は「回折」として起こる。

> 回折はマテリアル的-言説的（material-discursive）現象で，主体と客体，自然と文化，事実と価値，人間と非-人間，有機と無機，認識論と存在論，マテリアリティと言説性という内在的と考えられている分離に異議を唱える。……回折は差異をつくるためのマテリアルな実践である。（Barad, *Meeting* 381）

マテリアル・エコクリティシズムはこうした「回折」的読みを解釈方法論に適用して，テクスト解釈を「もつれの実践」（Iovino and Oppermann, "Introduction" 9）と見なす。すなわち，「テクストが世界の現象―自然の生活もしくは社会の文化的実践―を『反映している』と見なす」のではなく，「テクストと世界をエージェント的なもつれとして読む」（9-10）ことなのである。

以上見てきたように，エコクリティシズムの「マテリアルの傾向」の出現はエコフェミニズムの発展と深く関わっていた。この「マテリアルの傾向」は未だに続いている。マテリアル・エコクリティシズムの命名者の一人オッパーマンは，編者の一人として名を連ねる『フェミニスト・エコクリティシズムにおける国際的視点』（2013）中の論文「フェミニスト・エコクリティシズム―エコクリティシズムの軌道におけるポストヒューマニズムの方向」において，フェミニスト・エコクリティシズムを，「身体的フェミニズム，動物研究，トランスジェンダー理論，科学研究，女性のグローバルな持続可能な生活へのエコ活動，環境正義，ケア倫理，両性間と異種間の正義，環境的健全，そしてクイア・エコロジーにおけるマテリアルの傾向を生産的に組み込んだエコクリティシズムの理論と実践」（Opperman, "Feminist Ecocriticism" 30）として定義した。そして，「フェミニスト・エコクリティシズムはまた文学テクストにおいてこれらの問題を探る一種の文学批評である」と，エコフェミニズムとの違いを強調すると同時に，それが「フェミニスト」であるのは，「言説とマテリアルの実践において具体化されたジェンダー生成の問題に関心があるからである」（31）と，マテリアル・エコクリティシズムとも一線を画した。

＊本論は，JSPS 科研費　15H03189 の助成を受けている。

註

1．ちなみに，ジョニ・アダムソンとスコット・スロヴィックは，2009 年夏に発行された『アメリカ多民族文学』（*MELUS*）特集号「民族主義とエコクリティシズム」の序文において，同号は「新しい第三波エコクリティシズム」を表すと示唆していた。それは「民族や国家の特殊性を認めるにもかかわらず，民族や国家の境界を超え」，「人間経験のあらゆる様相を環境保護の視点から探求する」（6-7）という。これはスロヴィックが 2010 年『エコゾン@』で第三波エコクリティシズムについて列挙した中の（2）に該当する。

2．Iovino, "Steps" 136 の指摘による。「物語られる物質」は，のちにマテリアル・エコクリティシズムのキー

タームになる。たとえば，Iovino and Oppermann, "Introduction" 1-2 を参照。

引証文献

Abram, David. *Becoming Animal: An Earthly Cosmology*. New York: Vintage, 2010. Print.

Adamson, Joni, and Scott Slovic. "Guest Editors' Introduction: The Shoulders We Stand On: An Introduction to Ethnicity and Ecocriticism." *MELUS: Multi-Ethnic Literature of the U.S.* 34. 2 (Summer 2009): 5-24. *Project Muse*. Web. 3 Sept. 2016.

Alaimo, Stacy. *Bodily Natures: Science, Environment, and the Material Self*. Bloomington: Indiana UP, 2010. Print.

Alaimo, Stacy, and Susan Hekman. "Introduction: Emerging Models of Materiality in Feminist Theory." Alaimo and Hekman, *Material Feminisms* 1-19. Print.

——, eds. *Material Feminisms*. Bloomington and Indianapolis: Indiana UP, 2008. Print.

Barad, Karen. *Meeting the Universe Halfway: Quantum Physics and the Entanglement of Matter and Meaning*. Durham, N.C.: Duke UP, 2007. Print.

——. "Posthumanist Performativity: Toward an Understanding of How Matter Comes to Matter." Alaimo and Heckman, *Material Feminisms* 120-54. Print.

Bennett, Jane. *Vibrant Matter: The Political Ecology of Things*. Durham: Duke UP, 2010. Print.

Blackwell, Mark, gen. ed. *British It-Narratives, 1750-1830*. 4 vols. London: Pickering, 2012. Print.

——, ed. *The Secret Life of Things: Animals, Objects, and It-Narratives in Eighteenth-Century England*. Lewisburg: Bucknell UP, 2007. Print.

Caldecott, Leonie, and Stephanie Leland, eds. *Reclaim the Earth: Women Speak Out for Life on Earth*. London: Women's Press, 1983. Print.

Coole, Diana, and Samantha Frost. "Introducing the New Materialisms." *New Materialisms: Ontology, Agency, and Politics*. Ed. Coole and Frost. Durham: Duke UP, 2010. 1-14. Print.

Daly, Mary. *Gyn/Ecology: The Meta-Ethics of Radical Feminism*. Boston: Beacon Press, 1978. Print.

Diamond, Irene, and Gloria Orenstein. Introduction. *Reweaving the World: The Emergence of Ecofeminism*. Ed. Diamond and Orenstein. San Francisco: Sierra Club Books, 1990. ix-xv. Print. アイリーン・ダイアモンド，グロリア・フェマン・オレンスタイン編『世界を織りなおす—エコフェミニズムの開花』奥田 暁子，近藤 和子訳. 學藝書林，1994.

Gaard, Greta. "Living Interconnections with Animals and Nature." *Ecofeminism: Women, Animals, Nature*. Ed. Gaard. Philadelphia: Temple UP, 1993. 1-12. Print.

Gaard, Greta, Simon C. Estok, and Serpil Oppermann, eds. *International Perspectives in Feminist Ecocriticism*. New York and London: Routledge, 2013. Print.

Griffin, Susan. *Woman and Nature: The Roaring Inside Her*. New York: Harper and Row, 1978. Print.

Haraway, Donna. *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*. London: Free Association Books, 1991. Print. ダナ・ハラウェイ『猿と女とサイボーグ—自然の再発明』高橋さきの訳. 青土社，2000.

——. "Otherworldly Conversations, Terrain Topics, Local Terms." Alaimo and Hekman, *Material*

Feminisms 157-87. Print.

Hekman, Susan. "Constructing the Ballast: An Ontology for Feminism." Alaimo and Hekman, *Material Feminisms* 85-119. Print.

Hennessy, Rosemary, and Chrys Ingraham, eds. *Materialist Feminism: A Reader in Class, Difference, and Women's Lives*. New York and London: Routledge, 1997. Print.

Iovino, Serenella. "Steps to a Material Ecocriticism: The Recent Literature about the 'New Materialisms' and Its Implications for Ecocritical Theory." Rev. of Stacy Alaimo and Susan Hekman, eds., *Material Feminisms* (2008); Stacy Alaimo, *Bodily Natures: Science, Environment, and the Material Self* (2010); Jane Bennett, *Vibrant Matter: A Political Ecology of Things* (2010); David Abram, *Becoming Animal* (2010). *Ecozon@*3.1 (2012): 134-45. Web. 3 May 2016.

Iovino, Serenella, and Serpil Oppermann. "Introduction: Stories Come to Matter." Iovino and Oppermann, *Material Ecocriticism* 1-17. Print.

——, eds. *Material Ecocriticism*. Bloomington and Indianapolis: Indiana UP, 2014. Print.

——. "Material Ecocriticism: Materiality, Agency, and Models of Narrativity." *Ecozon@*3.1 (2012): 75-91. Web. 3 May 2016.

——. "Theorizing Material Ecocriticism: A Diptych." *ISLE: Interdisciplinary Studies in Literature and Environment* 19.3 (Summer 2012): 448-75. Web. 2 May 2016.

King, Ynestra. "The Ecology of Feminism and the Feminism of Ecology." Plant 18-28. Print.

Mellor, Mary. *Feminism and Ecology*. Cambridge: Polity Press, 1997. Print.

Merchant, Carolyn. *The Death of Nature: Women, Ecology, and the Scientific Revolution*. New York: Harper & Row, 1980. Print.

Murphy, Patrick D. "Ecofeminism and Postmodernism: Agency, Transformation, and Future Possibilities." *NWSA Journal* 9.3, Women, Ecology, and the Environment (Autumn 1997): 41-59. Web. 6 May 2016.

——. *Literature, Nature, and Other: Ecofeminist Critiques*. Albany: State U of New York P, 1995. Print.

Oerlemans, Onno. *Romanticism and the Materiality of Nature*. Toronto, Buffalo and London: U of Toronto P, 2002. Print.

Oppermann, Serpil. "Feminist Ecocriticism: A Posthumanist Direction in Ecocritical Trajectory." Gaard, Estok, and Oppermann 19-36. Print.

Penley, Constance, Andrew Ross, and Donna Haraway. "Cyborgs at Large: Interview with Donna Haraway." *Social Text* 25/26 (1990): 8-23. *JSTOR*. Web. 3 Sept. 2016.

Phillips, Dana, and Heather I. Sullivan. "Material Ecocriticism: Dirt, Waste, Bodies, Food, and other Matter." *ISLE* 19.3 (Summer 2012): 445-47. Web. 3 May 2016.

Plant, Judith, ed. *Healing the Wounds: The Promise of Ecofeminism*. Philadelphia: New Society, 1989. Print.

Slovic, Scott. "Editor's Note." *ISLE* 19. 4 (Autumn 2012): 620-22. Web. 2 May 2016.

——. "The Fourth Wave of Ecocriticism: Materiality, Sustainability, and Applicability." Senshu Universtiy, Tokyo. 5 August 2016. Lecture.

——. "The Third Wave of Ecocriticism: North American Reflections on the Current Phase of the

Discipline." *Ecozon@* 1.1 (2010): 4-10. Web. 4 May 2016.

Sullivan, Rebecca. Rev. of *Materialist Feminism: A Reader in Class, Difference, and Women's Lives. Canadian Journal of Communication* 24. 3 (Mar. 1999). Web. 16 Mar. 2016.

（法学部教授・イギリス文学・文化）